環海異聞 拾貳

和書門 類
二七四一九 號
八九 函
一四 架
一六 冊

内閣文庫
和書 類
二七四一九 號
一六 冊
一八五 函
九 架

内閣文庫
番號	和 27419
冊數	16 (13)
函號	185 130

国立公文書館 National Archives of Japan

環海異聞巻之十二

本船出帆并帰朝洋中之記

六月十六日　昨日迄海上諸事の用意悉く調ひて出帆す此邊海のことくなれとも二百尋ある所は真水なりしに掬て試るに塩氣なりしか次第に沖へ出るに従ひ左の方に赤山雲霧のことく見ゆ

同十八日　ダビッケといふ國の海上を過く此所は

今ハ海なりといふ

按スルニ此海和蘭ニ云フオヽストセイなるへし

往ヨリ湊ヘ川続きたりしめの内ハ甚タ深く

まもありしにや地形を併せ見て知るへし

カナスタヽより二千四百里の海路を経て七月比

以て着ヘてダヒツケといふ処のコツペイカツと云

所ニ舟をとゞむ

此所滞留中荷物並ニ船中洞所の仕切

なとも取来上陸す

此所地方よりの出張の様ニ見ゆ此所の岬

より向地スウエイツケと云処の海岸ニ対向し（ムカイアイ）

両岸の瀬戸ニ於て狭し大船漸十艘ならて

並ヘかたし通りて碇ニ而スウエイツケの篝火

なとことなきへも見ゆるとなりこゝハ魯西亜の

領域の出張所ニて少也

府下二里四方程人居家作も表通りまてつゝくと

凡西洋家造り街路及寺院の如きもペトルブルカ
ニ替る事もなき様ニ凡西洋男女容子も亦同
しき様なり但彼の地ハ少し替りし様も
莫西港滞留中ハ使節上陸し別ニ人家を借り
更て居れり且船中役々并の端舟を寄
陸へあけさり是ハ何故なると聞くニて
他境へ船を泊め置くニハ人質をとられ又端舟
を渡し置る事大法之となり

此湊ニ投錨滞留出帆の節ハ布帛器貨総料等
国王ニ謝礼し出帆せりとなり
此所より医師壱人画師壱人乗組せり
此男舟を掛し所を八皆陸へ
太十郎ハ上陸し府下を一見せり
上りしとなり来し 江戸若後ニ病気
日重くて歩行も得す送根と以て 我の若死ハ
舟中のみ居たり
魯西亜人ハ舟より陸へ度々出入しけり
掛ダジツケハ弟那馬児加(デ子ニルカ)なり甚哉府をコツペこ
ハーガ」と唱ふ 此都府とする所ハ魯西亜地方を

訛してコツペクなりといへる「コツペガワ」ハ「コンペンハーゲ」
の轉音と云也「ダンス」も「デンマルカ」の旧名なりコツペン
ハーガ」ハ此大地の東にある「セイランド」といへる島の東北
海邊にあり又「ソント」といへる狭き海峡ありて雪際亜国
の地と相對す彼その地等地誌に
載す和蘭譯説に詳なり

同廿七日晴　コツペカワ出船これより大洋へ出此
海中ハ暗礁多き所なりとて船路殊の外氣を
配りの安ずる也
八月朔日二日晴　アンケリといふ國の海上を通
船す

夜中海上にて軍船一艘あらはれ本船に向ひ
て石火矢の如くにて烟おこると発つ事頻りなり
此方よりハ是に應する石火矢をも放さざる
に彼方よりも不審に思ひしと見へ漕よせ
来る使舩レサノット舟師に命し何事にて
いつくの者なるやと問ハしむカベタン舟檣に
登り外国ルーブル　ありて声高に言ひたてて返答する旅を
和蘭にてルーブルと云彼方云何と云ぞや
とかくてしくとやせしハ何事なるれも哉

兵に命して石火矢を打掛しむ其時彼舟より
若これハアンゲリの軍船なり王船ハ何方
の仕わしにて何国の用ありてここに来る
舟そと以て是ハ魯西亜国より日本渡海の
使節舟なり何の故ありて妄りに石火矢
を打掛しや子細承らんと責め問けれとも
舟の者とも驚怖の様子にて暗(クラ)紛(マギ)れに
遠くて何国の軍船とも知らすかくの狼藉にこそ

せしハ全く麁忽の至り恐れ入るとて舟の帆を
下ケ詫言すら礼儀をなし追て酒肴様の色
来りて無礼を陳謝す使節ハ中々これを
受納すへき事の様合にや役人思ひの外人
右見しアンゲリ舟へ乗移りかの舟へハ
アンゲリの国王所湊まて船を寄せ我を
召くるとの都合之しと船中諸役人ニ申渡し
右別も彼舟にてアンゲリの都下まて往き

し頗なり

此一事当今なる事にて船中此人に頼る
けるに ハランソースケ 拂郎察 といふ国とアンゲリ
国と毎度戦あり 近頃ハランソースケ方軍け
られたれハ又寄せ来る事も有へきとて 軍船を
備へ警固せし折々の所に本船乗中近頃
せしかハ ハランソースケ舟の寄せ来る所へ人を遣り
てかくの振出しける者と見て 使節ハ彼の船

ロンドン
めしと号して いかで名付来るに乗せし
本船ハ使節の命令して アンゲリ国の内某と
いふ港に船を寄せ使節の帰り来るを待受く
此所大港にて軍船も余程居たり ハランソースケ
より棄られし彼軍船をもあまたここに
繋ぎ置けり
港の要害石火矢 数多く仕掛 備へ置けり二
階ある軍船もみへり

此所より水薪食物等を積し入る 以下舟をとかけし
所ハ何方よりも諸品を積し加ふへきより
故にアンゲリは漢文利亜（アンゲリア）此方よりいふ
イギリスなり当時なれとも世に名誉の
英吉利なり都府を龍動（ロンドン）といふ此都ヲロ
ニヤ国ハ海外に有る国有全く其の方に
属せしといふも種々物芸鈎のなる事とし

使節公幕都城を出ていつく所極めなるや知らん
此ハめくる洋従よ洋の舟とハ岸より湊の名ハ
覚へ可す
海岸の世界図に海路舟路と熟閲
するに龍動の南方に朱点有 又其の西南
海辺「ハム上」海浜に朱点を付し此所か初て朱点を引なり
始めの一朱点ハレサソット都よ出して上陸しける所を
今にても舟を出して港レサソットと称居りし湊ハ
英国ハ「ハルムート」又「ハルモウト」に作る見諸厄利亜（アンゲリア）の内
「コルシワル」諸一碗地にして壮麗なる大湊なり
都府接飯（ヘトルブルカ）の世界図　今ここに方図に見る所写し求め
九大二西書枚
にある地あり此に

御覧を経て差し上けらるゝ万国の図にハ海路
の朱線を引たり是ハ長崎滞留中同船の役人
漂客等よりいふ你等(ソコタチ)本国の地図を求め来ると
いふに是を返航しける所路茫絶するへし
者通行の海路を記し与へしとて最後に朱
引して贈れり此度編集参考のためにとて謄写
に示しけしかは関て是を接閲して別に原図
を模写せしめ地名等を和解しき朱線の海
路をも併せ写して模図に幅を合せりき朱線
の在所にハ彼国字をもて悉く日並を記すなるに是を
模して呈せり太平図模本の外別に一幅の地
図を作りき海路朱線日暦の事を記せるを和
解しけるものを添へて上けるはなりぬ
此図及細考和解ハ司天臺にて考定する所之
並図度より同氏に命せられ考る物といふ
抑此朱線日暦の記に由れハ漂客等か崎紀
し云所と大ひに異なり漂客等いふ所ハ

もとより従ふる略記なり彼人与ふる所の
物ハ船中行路日々の記なれハ甚正説と
すへきものゝ故にアンケリ以下の記ものは
これと對校して其説語の所に附記して
実説とすへき事なるのミ

此集録日暦 アンケリの湊より我長崎の湊に到るまで
と記し於ホ（トルブルク）よりアンケリまでの日並ハ略て略せり
是此アンケリまでの海ハ六ヶ敷く通船の熟路にて内洋
なれハ委しく記すに及ざる所なるを以てアフスス氏の人すへて
航海を略とする所にして通船の海路にて引続せる略説
疑くも此氏の如きは陸説の為に実測せるものなるべし

長崎伝役より此和解書にて彼年暦一千
八百三年八月十日にペトルブルグを発船す 是れ彼の
年月にて我享和三年癸亥六月十八日にあたる とて西洋暦算ハ支那の年
六月十二日と異へ年れたこれ彼と此と年暦
月日の数も相違せる事也かくの異へある
歴きも文異遠にてもあるにや何れにも太地暦
相あるよりアンケリまでの集録日暦を定きこれハ
説とするに拠なし

アニゲリ出帆彼是一千八百暦三年九月九
二十日 我癸亥八月二十日にあたる これより彼に記する所の日並
を按して我日暦にあて試むるに漂客
等略記の紀聞と相違あり依て以下の
紀聞日並ハ漂客是を遂し所を網して朱
線にて記に合考するものと見るべき所の意にて
其実徴を存する人とするなり

日十二二十日此に使節此船の用事を海に終りて
此港へ来る節本船出帆す
海路記を按するに出帆彼九月十二日とある
我癸亥八月八日にあたる漂客略記とハ四日の
違へあり地誌海路朱線此所より引初む
出帆後暫く南に向ふ洋中四方に島山の形一向
見へず但し初の内右の方にガニツケ所岸見る
とは聞なり

九月二日記 カナリヤといふ島へ舟を泊む

海路記を按するに彼十月九日カナリア島の内ヘツロ島に蒸船十六日迄滞船出入り数ちるして十六日出船とあれは彼十月九日ハ我八月廿二日なり即滞留ハ同十六日迄にて其日数六日也

按に此亜弗利加大洲に属す西洋の諸島此加那里亜島を以て初度に命す明人澤所謂福島これ之故に舟をよせ滞留して測量を試るなるへし此島諸蕃散在する處にてカナリアといふヘツロは其一之島にて其名の島是之第一なり

再ひ京畿の海路集録と熟閲するにカナリアまて舟を泊めある島の名ハ「テナリフ」即「テ子リフ」也ヘツロ島にハあらす出説誤れり此テ子リフハ即加那里亜島の内にて和蘭人此島を以て初度とする所之此島より西の方東西初度線の下にヘツロ島の名あり蒲よりは英島ハ此拂郎察人の初度とならす而之ヲロシヤ人も拂郎察の制に倣て此英島を以て初度とする之

海上日暦 ヲウラ八洲よりアメリカ洲に係る

彼 九月廿五日 アンケリ 我 八月八日
出船

彼 同廿六日 我 同九日

彼ハ十六日　我ハ十日　彼ハ十六日　我ハ十一日
同ハ十七日　同ハ十二日　同ハ十八日　同ハ十六日
同ハ十九日　同ハ十四日　同ハ二十日　同ハ十五日
同十月一日　同ハ十六日　同ハ二日　同ハ十七日

中略

同ハ九日　同ハ十四日

日数十六日ニして カナリヤ、着
カナリヤニは我十六日なり

所ニての日数六日滞船

此島ハイスパニヨラ（伊斯把你亜）の領所なりとぞ 此前後諸小島
多し 此邊沖清にて海浅し 島の大サ我九里程も
あらんと覚ゆ 島の中高山見ゆ 此所至て暖地なり
土人ハ裸躰（ハダカ）にて半役引きり周囲黒人（クロボウ）ニ似て黒色
唐し頭ハ髪切り之舟の葉汁被果とて人皆と日
於地しは此地ハ日本と同し節にて至暖 同様の
所なりと云ふ　按に此説信しがたし

此花と以て錦の入りたる絹の器彼ハ本より持渡人去産
の品ことにて船中へ度々来る

蒲萄　形大なり此品殊変　産する所のよし　蒲萄酒

按ニカナリアウエ井ニとて世ニ名高し上好の蒲萄
産する所なるへし又カナリーセホーゲん我邦ニて
カナリーヤと呼ふ鳥も此地の名産なり

柚　梨　橙（ダイダイ）　香橙（クネンボ）　林檎　葱

ホタン十のことき物　按ニ此品ニ年中なるへし

豕　鶏　野手（ヤキ）　鵞（アヒル）　此五種ニ産地なし
船中ニて大の信品を求め皆ニ用ひさう舟へ売
入たり
薪水を船へ積し加ふ舟の人ニ上陸ニ入す
太十郎ハ一人上陸せし様ニ見え
人の死を弟入ましきる物と此所ニて求め舟ニ載
す様なしき物とよひ近寄ても見ず蓋と開きける
時まく備てののぞき見てするに全く人の死骸に

按ニ末乃伊（ミイラ）なるへし洋服ニ洋帽す

此地通用金 三角形なるを見たり

御帆の旗ハ島中より役人と見ゆるものの五六人

亜欧の彼魯西亜人の彼と大抵 三角帽を冠り 是亦使節の冠

同しく其形不異用ニ見へたり

帽ニ中て其似たり 見送りニ来るを後旋と引あけて御帆

せんとする時彼奴らの方ニて も大炮を鳴ス

なりこれ御帆見送りの礼なりとぞ

大カナリア諸島の中なる洋銭を

同十七日夜中カナリヤ御帆

洋島の日数凡七十余日之

御船之後三四日ハ島々の見ゆるを通りしか其

後ハ島ハ一向見へ是比節沖風吹きあけハ巳午の

方より走り其より数日沖へ走りたれハ四日程は

風静ニなりて暑気極めて酷しく折々ハ雷雨も

あり殊ニ入りても暑熱甚しき海上ニて御なりその

比世界の真中へ来りしとて船中祝儀ありて為ニ

左之図球のまはりミ所をエクワトルといひ又ハ

使者曰日本へ出帆の時も
亦再ひ此所を通るなりと

按にエクワトルは羅甸語にて赤道の事也

此所アメリカ海に属すへし海路記と按

するに赤道を過船せし比ハ彼十一月

十二日より十五日の間我十月一日より同二日

迄の間と見ゆ

舟師（カベタン）称して語りしハカナリアより南アメリカ迄

の海上ハ世界第一の平穏なる所にて即エクワトル此

此下にあるといへり年中此所ハ風も静にて波穏

なる所也是より一日も走れハ風あるなり昔ハ有帆の

所へ来る事不思議の事といふへしといひつき此

過風静なる時へ却て船波く走りて大に帆柱損

破せり

又イワレヒヨーダロイチといふ人語りけるハエクワトルの

下ハ海水動かぬものゆへに里数を測ることも

仕かくしめ候節ニあつてハ動かぬ所あり地針の
如く人常ニ北ハ南へも少しも片寄る事なし是
数も多くありしたとへハいつよりも東へ見れも
少風ふくを以て帆なる所もあるゆへ此根ニ見へより

磐の作解
しかるし

此道より南ハ一ツ星　北極星　七曜星ニ見へ始めるニ
なりし所我々ハ誠の所驚き語り合ひたり赤道下
と通り過ぎて後ち南方ニ船走る見へけり走目

境ニて是と見へたり何方の所なりしや少しも違めす双方
より船の小様と振り合せて通り過ぎたり
沖を走る時海水の色変しける所二三る通りたり
紅(べに)脂ニ似て黒き如くなりとび色たいはんへしほニ擂りて
見へしニ上へあけても同色之と思ふるニカナリヤより
南アメリカ辺の内此海上らくと見ゆ
近く南アメリカといふ所へ船走るほし走去へ通行ニ道
ひ次第ニ難儀の暑熱となる故ニ船中毎日水ニ浴せり

十一月十日邑 南アメリカ州門のうし エカテリナと
いふ大湊に乗を泊む

按に海路記を換ふれハ彼十月九日我六月十二日
若ほ之此西近海路の日暦ある条に写せるか也

此所ハ南アメリカ洲中の一の大湊とみゆ此処も
エカテリナといふなし

按にブラシリー（伯西児 明人譯之）の一港とみゆ地図并長海
通行丸書上にもブラシリーとありブラシリーの領に

ある猥河といふ川の海に注く所にシントカナリナと
いふ地見をなる（譯名之）へし 再ひ地図と照閲するに伯西児（ブラシリ）の
辺海に乗を泊める条縁を引付ヶ
ふるはとみれハ夫大地の海に注きサンカラリニと云所之「エカテリ
ナ」と並へ書たし八此係りめへし此所赤道以南廿八度の辺にあり
和蘭人刹行せる度数の表にハ廿七度四十五分に作る非蒲湿児撰
せる輿地の表に「サンカタリナ」為ハ伯西児の海岸に層して赤道以
南廿七度にあるなり航海するもの熟識せる所と云ふ欧邏巴海分
西方に向ふ長途のものなるらん故に海船ここに至て薪水等船中の
用を弁し而後大南海に向ふなりされ伯西児の
海辺ハ波爾杜尾爾人所領の地なり

此地ポルトカリ 波爾杜尾爾の所属と曰ひ湊ハ大ひなれ
とも入海にて至て浅く大船ハ岸へよすること能はさる

此入江ニ小河幾筋も流通落る所ところ有
湊の内ニアンゲリ船二艘外ニ異国船二艘かゝり居たり
其浜辺ニ蝦夷国の石火矢を備へ置たり右地の舟ハ細長く
して笹の葉のごとし底ハ丸木二ツ割にしたる也板を
打付たる物を長すハ江戸の猪牙舟よりハ狭し
此所年中暑気強熱の地にて冬季といふ事なしと云り
船中何れも日ニ二三度ツヽ水ニ浴せり魯西亜人ハ何
程暑くても膚(ハダ)を露(アラ)ハす事いたさず水浴しても

必ずひとへの物を着て常ニハ毛織類を着す皮靴ハ長
月ニハ用ひぬといへり
土人色黒しペテルブルカにて見たりしクロボフは甚黒かりしか
又是よりハ少し薄黒し男女ともに跣足(スアシ)且裸(ハダカ)にて半股
引を着て腰をカナリヤにて見たる人のごとし縮毛(チヂレケ)編
髪にて眼ハ黒し女子も色黒し皆々風呂敷の様なる布
きたるときものとうけ腰から下ハ木綿又麻の織物にて
後の縫麻ニ仕立たる様な衣を着用せるをオロシヤ

の婦人のごとし男女ともに入墨ハせん
小児も色黒く丸裸なり男女とも髪ハ黒し常に
松脂のごときものを噛む不断口を動かして居る様に見ゆ
此湊より六里程奥へ行けハ千軒程の家居あり
太十郎ハ上陸してみしよし 家造りハ屋ごとに下をたかくあけ二尺程也
上ハ並石を以て畳ニあく屋根ハ樹の皮を用ゆ

図ニ此絵分明ならず

寺もありヲロシイアの寺ハ屋上ニあるものゝごとき十文字の形を建てあり寺内ハ見ざれ共形の様子を
見るに家ハ日本の人の形と同し

図ニ此寺ホルチユガルより建る所なるべし
湊へ上陸して水車にて米を搗る所を見るに
家ハ石造り屋根ハ樹の皮を二ツ割にして葺く是
く見えど見れハ尾屋のごとし水車ハ一ツにて三十六椎
つかする様ニ仕掛ある物也
此米粳麦稗なとあるよし 精米（ミラケ）にして多く他

出へ交易すとなり自国にてハ菜を食ふ事を禁せし
蜀黍を粉にし湯へ入也粥のごとくにして用由菜ハ
多く用ひす代出へおこをおのことなるよし鹿黍栽
邦の物と同し 椀ハ本地の物なり
鹿黍并船へ買入牛豚鹿鶩(アヒル)の雛をなむり山ハ樹
木繁茂をみなれする物にハ香橙橙抔見へさり 船
続奥の方に大高山あり 頂迄ハ中々登られぬよし
ヲロシヤ人も此山を見て高さ驚きさり

此所へ着岸まへ洋中にて檣をいためし故ここに着し
て後使者の役と上陸し山にて立木を買受け
帆柱を作れり彼是にて暫く此所に滞在せて
りきおろし来ると湊にて見てうしろに至て堅木にて
青き所黒き所も交りある木也 彼人カラスナ
セリリトといひ是ハ青木といふ事也

産地 鶏ハ船中へ数羽買入たり
菘(ナ) 萊菔(タイコン) 細し味ハ替ることなし 蕪菁(カブラ) 同し 冬瓜

西瓜(スイクハ)　番南瓜(カボチヤ)　胡瓜(キウリ)　蒲萄

番椒(トウガラシ)　実小なり木のごとく之のひさなり　蜜柑　柚

胡桃小なり　林檎　甘蔗(サトウキビ)　一本太さ凡一握りあり　牛の飼料に船中へ多く買入あり

白沙糖

大ひなる木実鶏くらゐあり上皮厚し剥きてこれハ
殻ありてかたく人面のごとき所ありてその内に肉汁一
杯あり甘きこと桃のごとし黒人(クロボウ)是を好むよ
入しさげて海を游き来り亦人へ売る程くも

これを買求め食ひけるに口中涼しく暑気を忘る
なるよいくたびたるく買ひ食せし之
其名を問ひしに忘れしと云　茂質ものに記せ
暖地なれハ椰子なるべくと　椰子(コツコス)一名椰子　杉のひし瓜
コツコスとハいへるもの中に白く乃うれハ漆大きもとを
去て以下大きくして成し如きもの彼人等コツコス
と唱へり　此殻を水飲に作り持参せしも
多くあるといふ　此の事と之れハ果して椰子殻也

椰子のる蒂実　別に洋書の譯説あり

生えし其実のまゝなるコツコスと多く舟へ買入る

蘓枋（スホウ）此去産あれど少しも不見

甚めて房となりしうるものお集りて一叢となりし一株

緑毛一房に三節角立長サ二寸斗あり初メハ緑り熟すれハ

肉黄色となる其き内密て一塊となりて色又熟せる

物のごとし房内白く味甘きすあけび（木通）のごとく仁子ハ

なし一叢二三十房つくものハ二三尺程あり木々草の

実のまゝすハ器をとあせハ大極尤のおとし

一綿ハ山へも圃にも種蒔することハ人種の木也
茎ハ大なるもよく綿（草綿）の葉に違ハすなし
故に木綿なるへし
一異木蕎赤く卵黄色の麻のことくなるを
紅へ潤ひ来れり然に来りし日人にてとひ
しハ多き葉種なりと
一魚ハ石のことくなる小蝦ハ多し
一頭ハ世牙生へて随分猪豚多し牛も同く
腴膾多し脂気多しとて魯西亜人ハ
食せす
一赤色にて鼻と嘴とハ赤くして色なき英
しきもあり鳴声ハキウ／＼といふ人
舌を出せハ嘴を以て喰ふなり名ハ不知
一甲の四角にて亀に似たる亂魚あり何といふ
ものにや文名ハきらす海豚の肌に似たり

ガルカルゼル圖

国立公文書館
National Archives of Japan

一此地にて商売を営ふにハイミパンツケ亜伊新把你の金銀にて交易す

此所数日滞在諸用整ひ出帆の用意ことをなせ滞在の日数其隙ニ詳ならす

十二月廿八九日比　エカテリナ出船

按に海路記よ彼暦至千八百四年二月八日朝とあれハ是ニ我日本十二月二十七日にあたる滞在の暗記と大概合す　此湊滞留七十一日

一猫ハ三毛なり我方のものと同し但し氣つよき様之猫ハ我より勢ふすなきやうに

一尾長猿あり船中へ買入飼置しよし日よ斃（ヲチ）たり

一毛ハ鼠色にて淺白（ウスシロリ）喙長く尾毛ハ虎斑（トラフ）丈二尺計り人によくなれ安き獣なり惣牙無臭あり是を日延買ひて船中に畜置たり

此日差延ハ中ニミヤーシツカ足屋の府同所へ

あけたり然り三州ハ船中ニて是を鑑たり

一がんかんぜんといふ物の子なりといふ四網(ヨツアミ)の
生きものと共へ持参せり其体の長サ二四
尺皮厚く文藻黒く鱗浮き立ち尾
ニハ棘刺(トゲ)あり口のきれあがりたる事七寸計り
八重歯生えて目此上なく徹く鏡のごとくなる
もの有り網爪(アミノツメ)ハ三本ありて長サ一寸計りも
其目の上鏡のごとくなる物生長すれハ角とて

なり山にも海にも栖(ス)みて人をも取り食ふと云
常に画に出せる龍ヲ見るに是と似たる
猶も見されハ龍の子ニ疑ひなかり
赤人船中にて酒に漬けて殺し白き紙を
つけを膳とを見去り肉もぬきて酒を入の人
生物のごとくにして貯へたり
按に諸書にいふコロコジルは鰐と掛たるに
鰐(ワニ)なり がんかんぜん」ハコロコジルに当れ

近く且形状も纏に相似たり和蘭写真器
と示せるに全くこれと同しくして少しく
異し所とハ蕃（タガ）子を以て之を除る所に總て器
を製するすたれのごとし
コロコジル訳説別に在り

此所より帆南へ向ひ走りけるが是迄ハ甚熱く裸（ハダカ）
にて居たりしが此より先き南へ至る頃海上次第に寒く
是西は亜墨利加大洲の正南此所の海上
なりといふ所に至る此辺何とかいふ所なりと船
中此人に問ひけれバそこはコリノメスと云所なりて至て
寒き所なり此所の海と至りし少し南へ又至
て暖気なる所へ向ひて進みり此辺より地方と
見ゆるハ山中より火煙立（チ）升り不絶に上りて止まで

案ずる和蘭にいふヒユールラント（火地）なり
此邊地々さの山より吹来る風至て寒しかりけるか
船を澪を也ともり付たりしして次第に南方の沖へ
流され数ヶ月切り居る翌年三月頃に至りしに
雪ふりて寒気も強し船中の人半の外に病
の様子之何ぞかくん変しかるをいひされハこなり
いよく南へ流されハ七十度斗の海上なり海
氷あり漁船なりぬ亦なりていふ

七十度といふことを彼ハセイムテナツウアラト（七十度）といふ
いひたりし南方も北極下と同しく極下に
近かれハかくあるなり也拂郎察鏤版の世界
図にハ南極下にも氷海界限の界あり寛和
漂民の為とおか帆しサンバミヤうと至り人とせし
此所より除して氷海へ入らしハ少極下に近
き七十度前後とある所を人より漂客等
南北極下に近き海上ハ極を寒めしは

赤道直下なる斎中の斎といふべし　又南
亜墨利加洲の狭きなる熱帯冷帯にかゝ
はるの大洋也
七十度お後迄ハ通船もなれたそれよりハ更に通行
ならぬ也といふ　此地人のいひしをかくの荒雑冷方
なし殊くハ西風とても吹發りドーブラナデジタ
の方へ船かりたきと念もし也
按に彼国板の世界図に亜弗利加洲のカー

ブデグ　デホープ　和蘭名にして明人所譯喜望峯也　の所に此
名ありこれ右大洲の岬にして和蘭の仮
所之北へ出るへき舟なるに東へわたる事を
欲ふハ実に荒雑にて通しがたきを思ひわかれたり
彼是ある内風吹發り旋風となりコリノメスと
出り北の方へ向て走りけれハ流に鳴せしてくに又
漸く暖氣の海上となれり
海中に湖水涌あるかごとし　尺面の所を通るなる事

あらしふとをちこちらの海上ならしに舟を見る

日本政府図書

国立公文書館
National Archives of Japan